

小学生の自治的能力に関する基礎的研究

— 児童・教員対象調査に基づく分析 —

A Study on self management ability of schoolchild
: An analysis basing on survey for schoolchild and teacher

飯尾友謙*・林 幸克†
IIO Tomonori・HAYASHI Yukiyoshi

I. 研究の目的

「今までキャンペーンをしてきてよかった」「緊張したけど、みんなに伝わったからうれしい」「人前で話す自信がついた」、これらは児童朝会で委員会発表を終えた児童の声である。何とも言えない笑顔で話す。学年・学級の枠を超えて、全校的視野に立って活動するからこそ責任や活動の大変さはあるが、その分、活動を成功させたときの達成感や自分への自信は大きなものになる。しかし、委員会活動の中で「面倒くさい」「去年と同じ活動でいい」「やりたい委員会じゃなかったから」などの声を聞くこともあり、やらされている感が強く受動的な姿勢もみられる。この二極化が生まれる要因として、学校生活を楽しく充実したものにしていくなぎ、高学年を中心とした児童会活動が有効であることは、周知の事実であるが、教師は児童が主体的な活動にできるような手立てを十分に打てていないことが挙げられる。確かに、学級担任の仕事があり、月2～3回の委員会の時間だけで、児童に問題を見つけさせ、じっくり活動を考えさせて、準備をして、活動させて、見届けることが難しいことは否めないが、そこにこそ一手を打ち、児童に成功体験をさせることが必要不可欠である。その成功体験につながった意識が、身に付けた見方や考え方が学級にも反映され、ひいては、次期児童会活動を担う学年の児童の意識を高め、伝統になっていく。

また、情報化、都市化、少子高齢化などの社会状況の変化を背景に、学習指導要領が改訂されるたびに人間関係の希薄化や自治的能力、自尊感情の低下が指摘されてきた。中央教育審議会答申（「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」2008）（以下、答申と略記）においては、「特別活動の充実が学校生活の満足度や楽しさと深く関わっているが、他方、それらが子どもたちの資質や能力の育成に十分つながっていない状況も指摘されている。—中略—

生活体験の不足や人間関係の希薄化、集団のために働く意欲や生活上の諸問題を話し合っ解決する力の不足、規範意識の低下などが顕著になっており、好ましい人間関係を築けないことや、望ましい集団活動を通じた社会性の育成が不十分な状況が見られる。」と述べられている。だからこそ、よりよい人間関係が前提となる「望ましい集団活動の形成」を指導原理とする特別活動に極めて大きな期待が寄せられ、具体的実践の充実が求められている。特に「より良い人間関係を築く力」「社会に参画する態度」「自治的能力」の3点の資質・能力の育成を図ることが求められている。

そこで、上記の課題が実際に教育現場にどの程度存在するのかを把握して、自治的能力の向上を図る児童会活動のあり方について考えるために、児童と教員を対象とした質問紙調査から検証・考察する。

II. 美濃加茂市立太田小学校（以下、太田小学校と略記）の概略

本研究の調査対象の小学生が所属する太田小学校は、美濃太田駅から約1.5kmの場所にあり、国道

* 美濃加茂市立太田小学校

† 教職実践開発専攻

41号線と国道21号線が交わる市域のほぼ中心部に位置している。学校南面には、木曾川が流れ、校区には中山道太田宿、坪内逍遙の生誕地、承久の乱跡など史跡も多くある。また、可茂地区の研修校として、学級づくりと教科づくり（国語・算数・社会・理科）を研究領域・教科として、2年おきに公表会を行っている。

保護者をはじめとする地域住民の多くは、学校教育に関心が高く、交通指導や総合的な学習の時間の支援などにも協力的である。他方、共働きの世帯、外国人世帯も多く、子どもとの触れ合いが持ちにくい家庭も増えてきている。児童数は2012年度571人である。男女比は学年によって、少し差はあるものの、ほぼ半数ずつである。通常学級18学級、特別支援学級2学級、合計20学級から成っている。

学校目標を「豊かな心を持ち、心身ともにたくましい子の育成から自らを鍛える子・自ら求める子・共に生きる子」と掲げ、学校生活の中で、仲間とかかわり合い、仲間のがんばりを見つけ活かしながら、自分たちの、自分の成長を実感できる学級づくりを学校全体で進めている。

Ⅲ. 調査方法

1. 調査対象

2011年12月上旬から中旬にかけて、児童と教員を対象に質問紙調査を実施した。児童は、太田小学校の通常学級の3年生から6年生を対象とした。教員は、美濃加茂市立西中学校（以下、西中学校と略記）と美濃加茂市立蜂屋小学校（以下、蜂屋小学校と略記）、太田小学校の教員を対象とした。

児童は、3年生55人、4年生94人、5年生86人、6年生72人、合計297人から回答を得た。教員は、西中学校24人、蜂屋小学校15人、太田小学校20人、合計59人から回答を得た。

2. 調査内容

社会状況の変化にともなう今日的課題における人間関係の希薄化や自治的能力、自尊感情の低下が実際に教育現場にどの程度存在するのかを把握するために、つけたい力や態度・気になる子どもの実態・自己肯定感・児童会活動における自治的能力に大別して回答を求めた。

Ⅳ. 調査結果と考察

1. 教員対象調査

(1) 子どもにつけたい力や態度

表1 子どもにつけたい力や態度（複数回答） n=59 単位：%

1 基礎的 基本的な学 力	2 自分 の考えや思 いを筋道立 てて発言す る力	3 仲間 の発言を聞 いて、つな げて発言す る力	4 自分 の考えや思 いを書いて まとめる力	5 資料 や情報を収 集し、選択 して活用・ 表現する力	6 仲間 のよさをみ つける力	7 自分 のよさを 知る力	8 リー ダーとし て仲間を まとめる 力	9 問題 を見だし 話し合い を通して 解決しよ うとする 態度	10 粘 り強く、 目標に 向かって 取り組 む態度
74.6	22.0	11.9	10.2	8.5	45.8	30.5	6.8	32.2	47.5

「教員として教育活動を通して、子どもにどのような力や態度をつけたいですか」という質問項目に対して、「基礎的・基本的な学力」(74.6%)が最も多く、以下、「粘り強く、目標に向かって取り組む態度」(47.5%)、「仲間のよさをみつける力」(45.8%)、「問題を見だし話し合いを通して解決しようとする態度」(32.2%)であった。他方、一番少ない回答は、「リーダーとして仲間をまとめる力」(6.8%)であった。この結果から、多くの教員が、学力の定着と豊かな人格の形成（他者とともに協同し、自己を生かす能力）の両面を育成することが使命であると感じて努めていることがわかった。

(2) 気になる子どもの実態

表2 気になる子どもの実態（複数回答） n=59 単位：％

1 リーダーをやりたいがらない	2 話し合いを敬遠しがちである	3 仲間関係が希薄である	4 粘り強く諸活動に取り組めない	5 問題や仲間のがんばり、思いに気付けない	6 正しい言葉遣いができない	7 家族とのコミュニケーションがうまくできていない	8 食生活が乱れがちである	9 交流の場で自分の思いや考えをうまく伝えられない	10 家庭学習が定着していない
3.4	0.0	37.3	33.9	23.7	13.6	18.6	5.1	16.9	28.8

「特に気になる子どもの実態について教えてください」という質問項目に対して、「仲間関係が希薄である」(37.3%) が最も多かった。その要因を自由記述から確認したところ、「放課後など、子ども同士（同学年・異学年）で遊ぶ機会が少ない」「ゲームやパソコンなど人と関わらなくても楽しめるものが身の回りにあり、仲間と関わる経験がない」ことが挙げられていた。「粘り強く諸活動に取り組めない」(33.9%) の要因としては、「失敗をさせない指導」「努力して成功したり、つらくても続けたらよいことがあったりしたなど自分の力で克服した体験が少ない」ことが挙げられた。「家庭学習が定着していない」(28.8%) の要因には、「家庭での見届けが弱い」「小中の系統性をふまえた家庭学習の指導が弱い」ことが挙げられていた。なお、「話し合いを敬遠しがちである」ことを選択した教員はいなかった。

この結果から、答申の指摘事項でもある「人間関係の希薄化」「好ましい人間関係を築けない」ことが実際に教育現場にあり、多くの教員が実感していることがわかった。また、学習指導要領の総則にもある「家庭との連携を図りながら、児童・生徒の学習習慣が確立するように配慮しなければならない」ことも実感しているようであった。

(3) 自己肯定感

表3 自分に自信を持っていない子ども n=58 単位：％

多い	どちらかという と多い	どちらかという と少ない	少ない
20.7	58.6	20.7	0.0

「自分に自信を持っていない子どもは多いと思いますか」という質問項目に対して、「多い」(20.7%)、「どちらかという和多い」(58.6%) で、合わせて約80%であった。その根拠としては、「褒められたり認められたりする経験が少ない」「よいところも悪いところもひっくるめて認めてくれる仲間関係が充分築けていない」「間違ふことへの不安」などが挙げられていた。また、「どちらかというと少ない」(20.7%) と回答した教員は、「よさみつけ」等の手立てをうっていること、「褒め・認め言葉かけがある」ことをその背景にあると指摘していた。

この結果から、答申の「自分に自信がもてず、人間関係に不安を感じていたり、好ましい人間関係を築けず社会性の育成が不十分であったりする」ことが実際に教育現場にあり、多くの職員が実感していることがわかった。

(4) 児童会・生徒会の自治力

表4 児童会活動・生徒会活動での自治的能力の高まり n=58 単位：％

高まっている	どちらかという と高まっている	どちらかという と高まっていない	高まっていない
12.1	48.3	36.2	3.4

「委員会活動をはじめとする児童会活動または生徒会活動において、効果的に自治力が高まってい

ると思いますか」という質問項目に対して、「高まっている」(12.1%)、「どちらかというが高まっている」(48.3%)で、合わせて約60%であった。その根拠として、「リーダーを中心に話し合い、キャンペーンなどの活動ができて」「児童朝会など児童生徒の手で運営できている」ことが挙げられていた。また、「どちらかというが高まっていない」(36.2%)、「高まっていない」(3.4%)と回答した教員は、「教師主導の活動が多い」「子どもが意欲を持って自分たちで意見を出し合い活動することができていない」「周囲の活動に自分から応え動いていく姿勢が弱い」ことを挙げていた。

この結果から、児童会・生徒会の自治力について、活動の表面的な姿を主体に捉えるか、活動に必然や意義をもっているのか内在的な実態を主体に捉えるか、教員の捉え方に違い・差があることがわかった。

2. 児童対象調査

(1) 学校生活が楽しいとき

表5 学校が楽しい時(複数回答) 単位：%

	1 友達と話したり遊んだりしている時	2 勉強している時	3 先生と話したり遊んだりしている時	4 係活動をしている時	5 当番活動をしている時	6 給食を食べている時	7 学校の行事をしている時	8 他の学年の子と話したり遊んだりしている時
全体 (n=297)	92.6	33.3	42.8	37.0	24.9	65.3	50.2	43.4
3年生 (n=55)	89.0	63.6	69.1	54.5	47.3	78.2	65.5	69.1
4年生 (n=94)	92.6	28.7	51.1	40.4	31.9	58.5	45.7	36.2
5年生 (n=86)	93.2	19.8	17.4	34.9	10.5	61.6	34.9	39.5
6年生 (n=72)	94.6	27.8	36.1	16.7	12.5	59.7	55.6	31.9

【全体】

「学校生活が楽しいときはどんなときですか」という質問項目に対して、「友達と話したり遊んだりしている時」(92.6%)が最も多く、以下、「給食を食べている時」(65.3%)、「学校の行事をしている時」(50.2%)、「他の学年の子と話したり遊んだりしている時」(43.4%)、「先生と話したり遊んだりしている時」(42.8%)と続いた。一番少なかった回答は、「当番活動をしている時」(24.9%)であった。

この結果から、友達や仲間との関わり合いを筆頭に、他学年の児童、教員と遊んだり話したりするコミュニケーションを図ることが、学校生活における楽しさの基盤であると考えられる。

【学年】

全学年で「友達と話したり遊んだりしている時」が最も多く、3年生89.0%、4年生92.6%、5年生93.2%、6年生94.6%であった。次いで、「給食を食べている時」が多く、3年生78.2%、4年生58.5%、5年生61.6%、6年生59.7%であった。また、「当番活動をしている時」は、5年生10.5%、6年生12.5%で比較的少なかった。

(2) 学校生活が楽しくない理由

【全体】

「学校生活がどちらかと言うと楽しくないと思う人は、その理由を教えてください」という質問項目に対しては、4人が「楽しくない」と回答した。

【学年】

「楽しくない」と回答した児童は高学年であり、男子1人、女子3人であった。

(3) 自分のよいところ

表6 自分のよいところの有無 単位：%

	ある	ない
全体 (n=311)	93.9	6.1
3年生 (n=55)	94.5	5.5
4年生 (n=94)	94.7	5.3
5年生 (n=88)	89.8	10.2
6年生 (n=74)	97.3	2.7

表7 具体的なよいところ（複数回答） 単位：%

	1 自分から話しかけることができる	2 自分からあいさつができる	3 自分の考えや思いをみんなの前で話せる	4 係活動を忘れずに取り組める	5 当番活動を忘れずに取り組める	6 運動が得意である	7 絵または工作が得意である	8 歌または楽器が得意である	9 料理または裁縫が得意である	10 みんなで決めたことに自分から協力できる	11 自分の苦手なことや大変なことでもがんばれる	12 リーダーとしてまとめることができる
全体 (n=292)	52.7	62.0	33.6	49.0	43.2	48.6	44.9	40.4	41.8	42.8	49.3	21.6
3年生 (n=52)	73.1	78.8	51.9	67.3	67.3	65.4	67.3	61.5	55.8	67.3	73.1	32.7
4年生 (n=89)	43.8	58.4	37.1	58.4	52.8	52.8	57.3	50.6	49.4	48.3	40.4	23.6
5年生 (n=79)	50.6	65.8	29.1	43.0	35.4	44.3	34.2	29.1	41.8	36.7	48.1	15.2
6年生 (n=72)	51.4	50.0	20.8	30.6	22.2	36.1	25.0	25.0	22.2	25.0	44.4	18.1

【全体】

「あなたには、自分のよいところはありますか」という質問項目に対して、「ある」(93.9%)、「ない」(6.1%)であった。具体的には、「自分からあいさつができる」(62.0%)が最も多く、以下、「自分から話しかけることができる」(52.7%)、「自分の苦手なことや大変なことでもがんばれる」(49.3%)であった。下位の回答は、「リーダーとしてまとめることができる」(21.6%)、「自分の考えや思いをみんなの前で話せる」(33.6%)であった。

ほとんどの児童が何らかの自分のよさを自覚しており、あいさつや話しかけることなど、自分自身で完結することではなく、相手との関わりがある事項が具体的に挙がっていた。しかし、「自分からあいさつができる」にしても、約40%がよさの一つとして挙げられていないことから、キャンペーン等の重点的な活動を節にして、より日常でこだわり、見届け、あいさつ習慣の定着を図る余地もあると思われる。また、主体的に自分から先頭に立って、活動を起こすことが弱く、受動的な姿勢の児童が多いと言える。そのため、多くの人の前で自分の考えや思いを表現したり、リーダー的な活動を経験したりする場を多く設定する必要があると考えられる。

【学年】

「ある」という回答は、3年生94.5%、4年生94.7%、5年生89.8%、6年生97.3%であった。「ない」と回答した児童は、全学年にいたるが、5年生(10.2%)が一番多かった。具体的には、3年生では、「自分からあいさつができる」(78.8%)、「自分から話しかけることができる」(73.1%)、「自分の苦手なことや大変なことでもがんばれる」(73.1%)が多かった。4年生では、「自分からあいさつができる」(58.4%)、「係活動を忘れずに取り組める」(58.4%)、「絵または工作が得意である」(57.3%)、5年生では、「自分からあいさつができる」(65.8%)、「自分から話しかけることができる」(50.6%)、「自分の苦手なことや大変なことでもがんばれる」(48.1%)、6年生では、「自分から話しかけること

ができる」(51.4%),「自分からあいさつができる」(50.0%),「自分の苦手なことや大変なことでもがんばれる」(44.4%)が上位であった。他方,「リーダーとしてまとめることができる」と「自分の考えや思いをみんなの前で話せる」は,全学年で下位であった。

(4) よくしたいこと・力をつけたいこと

表8 よくしたいこと・力をつけたいことの有無 単位: %

	ある	ない
全体 (n=311)	96.5	3.5
3年生 (n=55)	98.2	1.8
4年生 (n=94)	95.7	4.3
5年生 (n=88)	95.5	4.5
6年生 (n=74)	97.3	2.7

表9 具体的によくしたいこと・力をつけたいこと (複数回答) 単位: %

	1 自分から話しかけられるようになりたい	2 自分からあいさつができるようになりたい	3 自分の考えや思いをみんなの前で話せるようになりたい	4 係活動や忘れずに取り組めるようになりたい	5 当番活動を忘れずに取り組めるようになりたい	6 運動が得意になりたい	7 絵または工作が得意になりたい	8 歌または楽器が得意になりたい	9 料理または裁縫が得意になりたい	10 みんなと協力しあえるようになりたい	11 自分の苦手なところを克服したい	12 リーダーとしてまとめることができるようになりたい
全体 (n=300)	32.3	26.3	52.0	29.3	26.3	39.7	39.7	34.7	37.0	30.0	40.7	48.7
3年生 (n=54)	37.0	44.4	64.8	29.6	33.3	48.1	50.0	38.9	46.3	42.6	59.3	57.4
4年生 (n=90)	52.2	30.0	57.8	25.6	27.8	46.7	42.2	42.2	42.2	33.3	48.9	56.7
5年生 (n=84)	19.0	13.1	42.9	33.3	22.6	28.6	35.7	28.6	26.2	26.2	29.8	41.7
6年生 (n=72)	19.4	23.6	45.8	29.2	23.6	37.5	33.3	29.2	36.1	20.8	29.2	40.3

【全体】

「あなたには,よくしたいところや力をつけたいことはありますか」という質問項目に対して,96.5%が「ある」と回答した。具体的には,「自分の考えや思いをみんなの前で話せるようになりたい」(52.0%)が最も多く,以下,「リーダーとしてまとめることができるようになりたい」(48.7%),「自分の苦手なことや大変なことでもがんばれるようになりたい」(40.7%)と続いた。下位の回答は,「自分からあいさつができるようになりたい」(26.3%),「当番活動を忘れずに取り組めるようになりたい」(26.3%)であった。

この結果から,みんなの前で自分の考えや思いを話す表現力(言語能力)と先頭に立ってまとめるリーダー性を高めたいと考えていることがわかった。

【学年】

「ある」という回答は,3年生98.2%,4年生95.7%,5年生95.5%,6年生97.3%であった。

具体的には,3年生では,「自分の考えや思いをみんなの前で話せるようになりたい」(64.8%),「自分の苦手なことや大変なことでもがんばれるようになりたい」(59.3%),「リーダーとしてまとめることができるようになりたい」(57.4%)が上位であった。同様に,4年生では,「自分の考えや思いをみんなの前で話せるようになりたい」(57.8%),「リーダーとしてまとめることができるようになりたい」(56.7%),「自分から話しかけられるようになりたい」(52.2%),5年生では,「自分の考えや思いをみんなの前で話せるようになりたい」(42.9%),「リーダーとしてまとめることができるようになりたい」(41.7%),「絵または工作が得意になりたい」(35.7%),6年生では,「自分の考えや思いを

みんなの前で話せるようになりたい」(45.8%)、「リーダーとしてまとめることができるようになりたい」(40.3%)、「運動が得意になりたい」(37.5%)の回答が多かった。

(5) 学級での話し合い

表10 学級での話し合いの必要性 単位：％

	必要	どちらかと言えれば必要	どちらかと言えれば必要でない	必要でない
全体 (n=310)	53.9	35.5	7.7	2.9
3年生 (n=55)	92.8	3.6	1.8	1.8
4年生 (n=93)	59.1	37.6	2.2	1.1
5年生 (n=88)	31.8	52.3	9.1	6.8
6年生 (n=74)	44.6	36.5	17.6	1.3

表11 学級での話し合いが必要な理由(複数回答) 単位：％

	1 学校・学年行事の取り組みをよくしたいから	2 みんなの気持ちや考えを知りたいから	3 自分の気持ちや考えを伝えて、みんなに知ってもらいたいから	4 学校・学年行事が成功した理由や問題点を知りたいから	5 みんなの気持ちや考えを一つにしたいから	6 つらい思いをしている仲間を助けたり、学級の問題を解決したりしたいから
全体 (n=277)	60.3	50.5	35.7	45.1	51.3	66.8
3年生 (n=53)	79.2	62.3	58.5	58.5	64.2	69.8
4年生 (n=90)	58.9	54.4	40.0	55.6	61.1	73.3
5年生 (n=74)	50.0	41.9	17.6	28.4	44.6	63.5
6年生 (n=60)	58.3	45.0	31.7	38.3	33.3	58.3

表12 学級での話し合いが必要ではない理由(複数回答) 単位：％

	1 人前で話すことが苦手だから	2 みんなが気持ちや考えを話してくれないから	3 話し合いをして、「よかった」と思えなかったから	4 みんなのことよりも、自分のことの方が大事だから
全体 (n=33)	51.5	15.2	51.5	9.1
3年生 (n=2)	100.0	0.0	50.0	0.0
4年生 (n=3)	66.6	33.3	33.3	0.0
5年生 (n=14)	42.9	21.3	50.0	7.1
6年生 (n=14)	50.0	7.1	57.1	14.2

【全体】

「学級で話し合いをすることは、必要だと思いますか」という質問項目に対して、「必要」(53.9%)と「どちらかと言えれば必要」(35.5%)を合わせて約90%であった。その具体的な理由としては、「つらい思いをしている仲間を助けたり、学級の問題を解決したりしたいから」(66.8%)が最も多く、以下、「学校・学年行事の取り組みをよくしたいから」(60.3%)、「みんなの気持ちや考えを一つにしたいから」(51.3%)であった。一方、約10%の児童が「必要でない」「どちらかと言えれば必要でない」と回答した理由は、「人前で話すことが苦手だから」(51.5%)、「話し合いをして、「よかった」と思えなかったから」(51.5%)が多かった。

この結果から、ほとんどの児童が話し合いの必要性を実感していることがわかった。これまでに、話し合いを通して、考えや思いを一つにして問題解決できたこと、「話し合ってよかった」という経験をしていることがその背景にあるようである。

【学年】

「必要」「どちらかと言えば必要」の合計でみると、3年生96.4%、4年生96.7%、5年生84.1%、6年生81.1%であった。その理由に着目すると、3年生では、「学校・学年行事の取り組みをよくしたいから」(79.2%)、「つらい思いをしている仲間を助けたり、学級の問題を解決したりしたいから」(69.8%)が上位であった。以下同様に、4年生では、「つらい思いをしている仲間を助けたり、学級の問題を解決したいから」(73.3%)、「みんなの気持ちや考えを一つにしたいから」(61.1%)、5年生では、「つらい思いをしている仲間を助けたり、学級の問題を解決したいから」(63.5%)、「学校・学年行事の取り組みをよくしたいから」(50.0%)、6年生では、「学校・学年行事の取り組みをよくしたいから」(58.3%)、「つらい思いをしている仲間を助けたり、学級の問題を解決したいから」(58.3%)であった。他方、話し合いが必要ではないとする理由は、全学年とも、「人前で話すことが苦手だから」、「話し合いをして、「よかった」と思えなかったから」が上位であった。

(6) リーダー

表13 リーダーをやる意欲 単位：%

	やりたい	どちらかと言えばやりたい	どちらかと言えばやりたくない	やりたくない
全体 (n=309)	27.5	31.7	24.0	16.8
3年生 (n=55)	41.8	30.9	18.2	9.1
4年生 (n=94)	34.0	31.9	19.2	14.9
5年生 (n=86)	19.8	32.5	27.9	19.8
6年生 (n=74)	17.6	31.1	29.7	21.6

表14 リーダーをやりたい理由(複数回答) 単位：%

	1 みんなをまとめる力をつけたいから	2 仲間のために働くのが好きだから	3 人前で話したり指示したりするのが好きだから	4 やりきった充実感や達成感があるから	5 誰もやる人がいなかったから
全体 (n=183)	80.9	54.1	27.3	64.5	4.9
3年生 (n=40)	87.5	57.5	35.0	65.0	10
4年生 (n=62)	87.1	64.5	30.6	64.5	3.2
5年生 (n=45)	73.3	37.8	17.8	60.0	4.4
6年生 (n=36)	72.2	52.8	25.0	69.4	2.8

表15 リーダーをやりたくない理由(複数回答) 単位：%

	1 人前で話したり、指示したりすることが苦手だから	2 リーダー会などで休み時間がなくなるから	3 前にリーダーをやった、「よかった」と思えなかったから	4 みんなのことよりも、自分のことが大事だから
全体 (n=126)	78.6	22.2	19.8	2.4
3年生 (n=15)	73.3	33.3	13.3	0.0
4年生 (n=32)	87.5	25.0	9.4	0.0
5年生 (n=41)	80.5	17.1	21.9	2.4
6年生 (n=38)	71.1	21.1	28.9	5.3

【全体】

「リーダー(学級委員や班長、行事の実行委員など)をやりたいですか」という質問項目に対して、「やりたい」(27.5%)、「どちらかと言えばやりたい」(31.7%)を合わせると約60%であった。その理

由としては、「みんなをまとめる力をつけたい」(80.9%)が最も多く、以下、「やりきった充実感や達成感があるから」(64.5%),「仲間のために働くのが好きだから」(54.1%)であった。一方、リーダーをやりたくない理由では、「人前で話したり、指示したりすることが苦手だから」(78.6%)が最も多かった。

この結果から、約6割の児童がリーダーをやることに肯定的であり、その理由の8割は、まとめる力をつけたいというものであることがわかった。

【学年】

「やりたい」「どちらかと言えばやりたい」の合計でみると、3年生72.7%, 4年生65.9%, 5年生52.3%, 6年生48.7%で、学年進行に伴ってその割合は減少する傾向にあった。理由としては、全学年で、「みんなをまとめる力をつけたい」「やりきった充実感や達成感があるから」が多かった。他方、リーダーをやりたくない理由は、全学年で「人前で話したり、指示したりすることが苦手だから」が最も多かった。

(7) みんなの前で話す

表16 みんなの前で話すこと 単位：%

	得意	どちらかと言えば得意	どちらかと言えば苦手	苦手
全体 (n=310)	14.5	33.8	35.2	16.5
3年生 (n=55)	20.0	40.0	30.9	9.1
4年生 (n=94)	20.2	39.4	26.6	13.8
5年生 (n=87)	9.2	28.7	41.4	20.7
6年生 (n=74)	9.4	28.4	41.9	20.3

表17 「みんなの前で話すこと」が得意な理由(複数回答) 単位：%

	1 仲間が聞いてくれるから	2 仲間が自分の考えや思いにつないで発言してくれるから	3 先生が聞いてくれるから
全体 (n=150)	75.3	76.7	44.0
3年生 (n=33)	87.9	72.7	42.4
4年生 (n=56)	76.8	85.7	62.5
5年生 (n=33)	72.7	69.7	27.3
6年生 (n=28)	60.7	71.4	28.6

表18 「みんなの前で話すこと」が苦手な理由(複数回答) 単位：%

	1 仲間が聞いてくれないから	2 仲間が自分の考えや思いにつないで発言してくれないから	3 先生が聞いてくれないから	4 自分の意見が間違っていたら恥ずかしいから	5 みんなの前で話す経験が少ないから	6 わかりやすく話す話し方がわからないから
全体 (n=160)	6.3	6.9	0.6	65.0	40.6	62.5
3年生 (n=22)	9.1	0.0	0.0	63.6	36.4	54.5
4年生 (n=38)	7.9	13.2	2.6	73.7	44.7	71.1
5年生 (n=54)	9.3	7.4	0.0	68.5	35.2	59.3
6年生 (n=46)	0.0	4.3	0.0	54.3	45.7	63.0

【全体】

「自分の考えや思いをみんなの前で話すことは得意ですか」という質問項目に対して、「得意」(14.5%),「どちらかと言えば得意」(33.8%)で、合わせて約50%であった。その主な理由は、「仲間が自分の考えや思いにつないでくれるから」(76.7%),「仲間が聞いてくれるから」(75.3%)であった。他方、苦手な理由としては、「自分の意見が間違っていたら恥ずかしいから」(65.0%),「わかりやすく話す話し方がわからないから」(62.5%)が主なものであった。

【学年】

「得意」と「どちらかと言えば得意」の合計でみると、3年生60.0%, 4年生59.6%, 5年生37.9%, 6年生37.8%で、中学年から高学年にかけて減少する傾向にあることがわかった。得意な理由では、全学年とも、「仲間が自分の考えや思いにつないで発言してくれるから」「仲間が聞いてくれるから」が主なものであった。一方、苦手な理由では、全学年とも、「自分の意見が間違っていたら恥ずかしいから」「わかりやすく話す話し方がわからないから」が上位であった。

(8) 児童会活動

表19 児童会活動の楽しさ 単位：%

	楽しい	どちらかと言えば楽しい	どちらかと言えば楽しくない	楽しくない
全体 (n=161)	52.8	29.8	11.2	6.2
3年生 (n=87)	60.9	26.4	10.4	2.3
6年生 (n=74)	43.2	33.8	12.2	10.8

【全体】

「委員会活動など児童会活動は楽しいですか」という質問項目に対して、「楽しい」52.8%,「どちらかと言えば楽しい」29.8%で、合わせて約80%であった。その理由を自由記述からみると、3つに分類できた。

- ① 「色を塗って作ることが好き」「劇やキャンペーンするのが好き」「みんなと協力することが楽しい」など『自分自身が楽しいこと』
 - ② 「仲間が褒めてくれる」「みんなが実行してくれるとうれしい」「協力してくれて成功するとうれしくなる」「声をかけてくれる」など『認めや反応があること』
 - ③ 「何のために働けるから」「自らよりよい学校を創っていけることがうれしい」「みんなで活動して学校を明るくできるから」など『全校的視野や使命感があること』
- 一方、楽しくない理由は、2つに分類できた。

- ① 「面倒くさい」「作るのが得意でない」「発表が嫌い」など『個人的なものに関わること』
- ② 「いつも同じ活動」「厳しい」など『活動のあり方に関わること』

【学年】

「楽しい」「どちらかと言えば楽しい」の合計でみると、5年生87.3%, 6年生77.0%であった。

V. 今後の課題と研究の方向性

児童と教員の質問紙調査の調査結果を比較すると、両者が求める資質・能力にズレや差がみられた。

1. 教員が児童につけたい力と児童のつけたい力のズレ

児童が「自分のよいところ」として回答した中で、「リーダーとしてまとめることができる」

(21.6%)、「自分の考えや思いをみんなの前で話せる」(33.6%) が少なかった。「よくしたいこと・力をつけたいこと」で多かった回答が、「自分の考えや思いをみんなの前で話せるようになりたい」(52.0%)、「リーダーとしてまとめることができるようになりたい」(48.7%) であったことを勘案すると、多くの児童が自信がないと感じているといえる。

一方、教員が「気になる子どもの実態」として多く挙げた項目は、「粘り強く諸活動に取り組めない」(33.9%)、「問題や仲間のがんばり、思いに気付けない」(23.7%) であった。「子どもにつけたい力や態度」の回答で、「粘り強く目標に向かって取り組む態度」(47.5%)、「仲間のよさをみつける力」(45.8%) が多かったことを勘案すると、それだけ教育活動を通して精神的な成長を培うことを重要だととらえているといえる。児童の意識や実態と比較すると、「子どもにつけたい力や態度」で最も少なかったものは、「リーダーとして仲間をまとめる力」(6.8%) であり、多くの児童が力をつけたいと願う「リーダーとしてまとめることができるようになりたい」こととは合致しない。

また、「自己肯定感が弱い児童生徒が多いと思うか」では、79.3%の教員が「多い」と感じており、その場面として、「発言する場面」が挙げられていたが、「子どもにつけたい力や態度」の発言について、「自分の考えや思いを筋道立てて発言する力」(22.0%)、「仲間の発言を聞いてつなげて発言する力」(11.9%) が低く、つけたい力に関して、児童と教師の実態に齟齬がみられた。

2. 教員間の「自治的能力のとらえ方」の差と児童の児童会活動を通した「楽しさの質」の差

児童会における自治力をみた場合、教員も児童にも、自治力の高まりのとらえ方に差があり、質の高さを求めることに弱さがみられた。

児童の82.6%が児童会活動を「楽しい」「どちらかと言えば楽しい」と感じていた。その理由として「自分自身が楽しいこと」が挙げられていた。児童会に限らず、自分自身が楽しいことは活動の基盤であり、必要不可欠であるが、高学年時の限られた活動である児童会活動の意味・意義から考えたとき、ただ自分が楽しいという表層的な楽しさをつかむだけでは十分ではないと思われる。児童会活動は、学級の枠を超えて、他学年との関わり合いがあり、大勢の前で活動する場がある。だからこそ、「自分たちがはじめたことが全校みんなが実行してくれるとうれしい」「大変なことをするとやってよかった」など楽しい理由にもあった「認めや反応があるとうれしく、やる気が出てくること」「全校的視野で考え活動することの責任の重さとその分のやりがいを感じる」という深層的な楽しさを実感させることが求められなければならない。また、「楽しくない」「どちらかと言えば楽しくない」の理由にあった「いつも同じ活動」など教員側にも改善の余地がある。

以上のことから、児童会活動を中核にして、意見表明のための表現力の涵養と集団をまとめる力の経験を蓄積しながら、「組織的に委員会活動の充実を図るリーダーの育成」「次期児童会活動の中核を担っていく学年の育成」「担当学級に愛着をもって活動する委員の育成」「児童会と学級の連携を促進する教員組織の育成」の4点に着目して、今後、実践・検証を進めていきたい。

参考文献

- ・中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」2008
- ・宮川八岐『小学校新学習指導要領 ポイントと学習活動の展開 特別活動』東洋館出版社、2008
- ・埼玉県連合教育研究会、埼玉県特別活動研究会『特別活動研究記録第50集 絆を深め、楽しく豊かな学校生活を創る特別活動』埼玉県特別活動研究会、2011
- ・文部科学省『小学校指導学習指導要領解説 特別活動編』、2008
- ・文部科学省『特別活動の現状課題、改善の方向性』（検討事案）、2011年8月閲覧
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/06100302/005.htm

